

天才アートKYOTO



天才アートとは、障碍のある人の多くがもつ優れた感性と表現力、そこから湧き出る独創的なアート作品に対して、特定非営利活動法人 障碍者芸術推進研究機構がネーミングしたものです。欧米ではアール・プリュット、あるいはアウトサイダー・アートなどと呼ばれています。当機構は天才アートを推進し、その啓発活動を行っています。

会 報
No. 16

天才アート

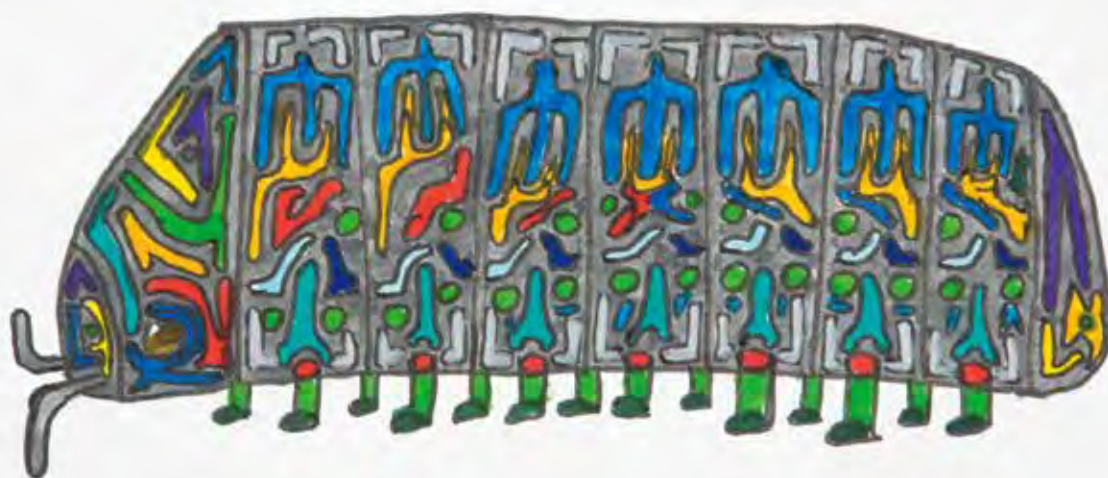
発行日 2017年12月25日 (月)

発行者 特定非営利活動法人
障碍者芸術推進研究機構

天才アート KYOTO

発行所 〒605-0811
京都市東山区大和大路四条下る
4丁目小松町 四条・新道アトリエ
info@tensai-art.kyoto
http://tensai-art.kyoto

編集 株式会社 三六六



『ローリングベトリファクトインセクト』(上)・『ドラッグ兵 飛兵長 (ハイドラゲーン)』(下) 根ヶ山 恵司 Keishi NEGAYAMA 画用紙・カラーペン 210×295mm 2017年

展 覧 会

予 告

天才アートABC展 2会場で開催!!

天才アートABC展

1 2018.1.11(木)~1.21(日) 11:00~18:00 観覧料 1700円
会場 堀川御池ギャラリー

2 2018.1.13(土)~1.19(金) 10:00~18:00 観覧料 1500円
会場 東山区総合庁舎2F 東山青少年活動センター

Animal Bird Collection

2018新春展
天才アートの
動物・鳥

会場は、市内中心部の中京区とアトリエのある東山区の2会場で並行開催します。初詣などに合わせてぜひ立ち寄りください。

【会場・会期】

〔中京会場〕堀川御池ギャラリー

京都市中京区堀川通御池西入る押油小路町238-1

会期 2018年1月11日(木)~21日(日)

11時~18時(最終日は17時まで・月曜日休館)

交通 地下鉄「二条城前駅」下車2番出口より徒歩2分

市バス「堀川御池バス停」下車徒歩1分

〔東山会場〕東山区総合庁舎2F 東山青少年活動センターロビー

京都市東山区清水5丁目130-6

会期 2018年1月13日(土)~19日(金)

10時~18時(最終日は16時・水曜日休館)
交通 市バス「清水道バス停」下車徒歩すぐ

展 覧 会

報 告

『天才アート展 2017』 Report

2012年の第1回から数えて、第6回目となる『天才アート展2017&シンポジウム』を好評のうちに終了しました。会期は10月27日(金)より11月8日(水)までの11日間(月曜休館)で、「堀川御池ギャラリー」の全室を会場に開催。

今展では、天才アートKYOOTOの作家29名の絵画作品59点・立体作品100点、協賛出展として障害者支援施設DOの7名の絵画作品等11点、京都市洛西ふれあいの里授産園の5名の絵画等作品10点・陶芸作品8点、京都市立呉竹総合支援学校の3名・6点、同東総合支援学校1名・3点、また個人で制作活動をされている、高田美貴氏の絵画9点、今回初出展の木村康一氏の陶芸作品68点、総勢47名の計274点を展示。

来場者は964名を数えました。29日(日)に台風22号の暴風雨警報が発令され、来場者が例年の3分の1と大幅に減少した影響がなければ、一

日当たりの来場者は100名超と過去最高を記録したものと思われま。

今展と、9月下旬開催の前期展『ウィングス京都・ギャラリースペース開設記念展“endless, breath”』の来場者514名と合わせて、前後期展の延21日間で計1478名の方に来場いただきました(前期『endless, breath』展の概要は会報15号で報告済み)。本年1月の「天才アート展in東山」花と鳥と動物との475人、5月企画展「非形態の表象」の857人をはじめ、5月の左京市民活動センターの展示、8月の京都マルイの展示、などを合わせれば5千人を超える市民などに展覧いただきました。

シンポジウムは「障害者芸術の振興にかかわる諸問題」をテーマに28日(土)、堀川音楽高校城翼アリーナで開催。下嶋千佳さんのピアノ演奏のあと、甲南大学文学部准教授・服部正氏の講演、鼎談と続き、会場からも質問が寄せられるなど、障害者芸術に関する熱い議論が交わされました(講演と鼎談の詳細は、P3~5をご覧ください)。



天才アート展2017シンポジウム

「障害者芸術の振興にかかわる諸問題」

第1部 講演

「日本の障害者芸術の現状と課題」

〈講師〉甲南大学文学部准教授 服部正氏

障害者の創作活動の萌芽期

日本での知的障害者のための福祉施設は、1891（明治24）年に設立された滝乃川学園が初めてであり、その後白川学園1909（明治42）年、藤倉学園1919（大正8）年、八幡学園1928（昭和3）年などが設立された。当時、生活困窮者への公的救済の仕組みは殆どなく、親族などによる自助が基本で身寄りのない人ややむを得ず国が救済する恤救規則1874（明治7）年があるだけであった。後に、救済対象者が障害者等を含む救済法1929（昭和4）年が施行されるが、生活困窮者で業務遂行が著しく困難な人等に限定されるものであった。公的救済が殆どない時代に民間の篤志家の方々が知的障害者の救護施設を運営していた。施設では、図画・工作・手芸など、教育的なカリキュラムが療育の一環として行われていた。日本の障害のある方のアートはこうして福祉の中で始まった。今日、厚生労働省の2017年の新事業として、2億円の予算で障害者芸術文化活動普及支援事業が実施されていることなどをみると、隔世の感がある。しかし、



今行われている障害のある方の創作活動への支援というのは、障害者福祉、障害者の幸福、また、芸術文化の発展という観点から多少の問題を含んでいると思っている。

八幡学園と山下清

八幡学園は1928（昭和3）年、久保寺保久が特異児童教化養護事業として設立し、家族が中心となって運営していた。八幡学園は園芸のほか、制作活動も活発に行っており、特に貼絵は知的障害者に良好な実益がある訓練として取り組んでいた。

山下清1922（大正11）年生は、1934（昭和9）年5月八幡学園に入所し、貼絵を始める。1936年に八幡学園を訪れた早稲田大学哲学科心理学教室の戸川行男らが、貼絵を始めて2年目の山下清の貼絵の面白さを見出し、早稲田大学心理学教室紀要で紹介した。その後、早稲田大学の戸川行男と八幡学園園長の久保寺保久がタッグを組んで山下清のプロモーションが進んでいく。

山下清の作品は、当初早稲田大学の講堂や図書館など大学構内で展示されていたが、心理学の分野を離れて全国各地で展覧会が行われ、1939年に老舗の画廊である東京銀座の青樹社でも展示されることとなった。その時にカラー刷りの画集も出版される『特異児童作品集』春鳥会。この展覧会は5日間で2万人が訪れ、画集も増版を重

ねるほどの売れ行きで大変な評判となった。

山下清と美術界

山下清の作品はこのような過程で美術界と接続していった。作品展の評判をマスコミがセンセーショナルに報道し、プロの画家や画壇の権威を揶揄するようなニュアンスがとて強い記事も掲載された。それに対して芸術家や文化人が反発した。展覧会についての座談会（昭和15年2月『みづる』第426号）では、谷川徹三（哲学者・元法政大学総長）や伊原宇三郎（洋画家）が山下清の作品を批判する内容の発言を行った。

小林秀雄（文芸評論家）はさらに批判的で、山下清の作品は確かに上手であるが意味とか情緒という深みがない空虚な作品であるという趣旨の批判を行っている。（清君の貼紙絵『文藝春秋』昭和15年2月、第18巻2号）。戦後、金閣寺が放火された事件の犯人が精神疾患だったことを受けて山下清の作品展のことに触れ、山下清と同時に山下をプロモーションしている戸川行男に対しても辛辣な批判を行った（『金閣焼亡』『新潮』、昭和25年9月）。このように、芸術家たちは自分たちのプライドを守るために、山下清も含め障害者の芸術は本物の芸術ではないというスタンスで接することとなる。

山下清と福祉界

他方、久保寺保久はこの時期、十数か所しかない知的障害者のための私立施設を大同団結して運動体にする日本精神薄弱児愛護協会を設立（1934年10月）するため全国を奔走したり、救護法より充実した精神薄弱児保護法をつくる運動を進めた。

この頃の時代背景は、日中戦争から太平洋戦争へと戦局が激化する時代であるが、久保寺は人的資源が求められるこの時代にこそ知的障害者の支援をするべきという論法で法律の制定を進めた（『みづる』臨時増刊号「特異児童作品集」参照）。

山下清の貼絵は知的障害者の療育として施設で取り組まれていたが、展覧会は知的障害者の福祉向上という社会運動の広告塔の役割を果たしていた。久保寺保久は、国内外で知的障害者の保護について講演し、山下清の貼絵は訓練によって知的障害者にもこれだけのことができるということを示すもの、いわば手持ちカードとして使われていた。このように戦前戦中に行われた山下清の展覧会に対して、ジャーナリズムは興味本位であり、美術界は保身に忙しく、福祉界は政治的な、あるいは福祉的施策のための運動に使っていて、そこには山下清本人に対するリスペクトや、本人の幸福という視点からの支援がなされていなかったことが分かる。

山下清の八幡学園出奔

山下清は、昭和15年11月18日に八幡学園を出奔した。2年半後に帰ってきたときに、過ごしてきたことを日記に書くように言われ、色々な所に住み込みで転々としてきた様子をあたかもレコーダーに録画したものを自在に再生するかのように記憶の引き出しから取り出して書くことができた（山下清『裸の大將放浪記』1979年、ノーベル書房参照）。

指導主事であった渡辺実氏は、山下清が日記の中で「学園に飽きた」と書いてあることを学園が居心地の悪い場所になったと解釈し

た。学園に参観に来た人は、絵をのぞき込んだり話しかけてきたりする。そんな外からの急激な刺激が山下清にとって耐えられなかったと書いている（「学園より突然姿を消した山下清」、式場俊三監修『みんなの心に生きた山下清』山下清展企画室、1997年改訂版 参照）。

山下清は絶えない参観者の前でいつも貼絵をさせられていたようで、作品の中に、貼絵を強要され撮影されている本人が題材になっている作品がある。当事者不在の支援があったと思わざるを得ない。

国難という言葉が選挙のキャッチフレーズに使われる今、東京オリンピック・パラリンピックの成功が国家的使命のように語られ、障害のある方の芸術活動が展開されていく中、その活動が本当に当事者のためになっているのか、考えてみる必要がある。

障害者の創作と美術界の乖離

山下清の作品に対し、芸術家、文化人が距離を置くというスタンスは、戦後も続いた。戦後、戸川行男は山下清から距離を置くが、文筆家・精神科医である式場隆三郎が、如才ないプロモーションを行う。「日本のゴッホ」「裸の大将」「放浪する天才画家」など様々な愛称をつけて大衆的な人気を高め、山下清を国民画家へと押し上げた。

しかし、それを美術界は認めようとしなかった。その典型的な例として美術評論家である嘉門安雄を挙げる。国立西洋美術館に於いて昭和33年に日本で初めてのゴッホ展が開催されたときの担当であった嘉門安雄は、当時封切直前の「裸の大将」の映画の主演者と山下清が作品の前で写真撮影をした

との申し出があったことについて、山下清の絵は特異的な天分によつて優れているのかもしれないが、決して優れた芸術ではなく、それにも関わらず、日本のゴッホなどと言うことはゴッホの人間と芸術の許しがたい冒瀆である（嘉門安雄『ヴィーナスの汗』文藝春秋社、1968年参照）などと書いている。

障害者の創作とアール・ブリュット

美術界が、障害のある人の芸術と距離を置くようなスタンスはずっと続いていた。私がこの分野に関わり始めた1990年から1995年頃は、まだ障害者の芸術について研究する人は少なかった。2000年から2010年頃には、漸く障害者の作品を自主的に展示する美術館が増えてきたり、興味を持つ美術関係者も増えてきた。しかし、2010年以降の動向は、障害者の創作を「アール・ブリュット」と呼ぶことで、山下清の時と同じように、障害者の地位の向上や生活環境の向上という使命のために作品を利用したりする傾向が強まり、また戦前戦後の頃のように障害者の芸術から美術界が離れていってしまうことが危惧される。

第55回ヴェネチア・ビエンナーレ（2013年）に自閉症である澤田真二さんの作品が招待出品されたが、そのニュースが障害がある方が選ばれたという観点から語られてしまったり、障害のある方の才能を認め、地位を高めましようという運動につながってしまった。政治的な場面で利用されたりしてしまうことも多かった。それは、美術関係者が離れていく原因になりかねないことであり、美術関係だけにとどまらず、より広範囲においても起こりうる危険と考える。

そして、もう一つ考えていかなければならないことは、アール・ブリュットという言葉が2011年以降から障害者の創作活動の代名詞のように使われるようになったことである。

アール・ブリュットという言葉を生み出したジャン・デュビュッフエは、アドルフ・ヴェルフリ他数名の精神疾患のある患者の作品に感銘したことがきっかけでこの言葉を作ったが、精神疾患のある人の芸術だけでなく、美術界とは無縁の人たち、芸術表現に知識の乏しい人たち、意図的に距離を置いている人たちによる創作物を対象とする（Jean Dubuffet, *Lettre au Dr.G.de Morsier, Paris, septembre 1945* 参照）と言っていることから、障害のある方の芸術のことを指しているではないことが分かる。

日本のアール・ブリュットに限っては、この言葉が障害者の創作とほぼ同じものと思われている。障害者の創作作品には人を感じさせる素晴らしいものがあるというクオリティの重視と、訓練を重ねて健常者と同じようなものを作ることを目指さないというオリジナリティの尊重という障害者の創作に対する一般的なスタンスは、アール・ブリュットの影響下にあるものと考えることが出来る。障害者の作品をアール・ブリュットと表現することは、ごく一部の優秀作品ばかりを強調することにつながり、障害者の全体の福祉や支援の問題が隠れてしまう危険性がある。

障害者の創作活動と現代美術

第14回ドクメンタ（ドイツ・カッセル 2017年6月10日～9月17日開催）のメインテーマは「アテネに学ぶ」で、社会で起

きているアクチュアルな問題について考える作品ばかりを徹底的に集めた展覧会であった。アートは、社会の問題と積極的に関わるものであるというメッセージと、社会活動家に近いアーティストが増えていることが象徴されている展覧会であった。

それより以前、ロンドンパラリンピックの開会式のメインイメージは、マーク・クインによる「妊娠したアリソン・ラップ」で、手足に障害のある写真家をモデルにした巨大な彫刻作品であった。そこには、身体障害者をモデルにした人体彫刻が世の中に殆ど存在しないということは、社会の無意識的、あるいは意識的な差別のあらわれではないかというメッセージが込められている。ロンドンパラリンピックは、単に障害のある人のスポーツや芸術などの優れた能力を賞賛するのではなく、障害や格差など社会が抱える様々な問題と向き合う機会にしなければならぬことを示したものと考えられる。いまや福祉の向上のためには、社会を変えるために社会と向き合う優れた現代アートとの対話や協働は不可欠であると思われるが、障害者の創作活動をアール・ブリュットという名前で囲い込んで通常の美術と切り離してしまうことは、社会の問題と向き合う現代アートとの共存や協働の可能性を減じてしまう危険があるのではないかと考える。

2020年に開催される東京パラリンピックに障害者の芸術で花を添えるというような短絡的な目標設定ではなく、この機会に障害者を取り巻く諸問題に向き合い、それらの問題の解決をめざすためにも、障害者芸術への支援のあり方を今一度立ち止まって考えてみる必要がある。

第2部 鼎談（抄録）前編

「障害者芸術の振興にかかわる諸問題」

文化庁地域文化創生本部 事務局長

松坂浩史氏

多摩美術大学学長・京都芸術センター館長

建畠哲氏

甲南大学文学部 准教授

服部正氏

〈進行〉天才ARTKYOTO 理事長

高島寛

障害者芸術について感じる点

高島 「障害者芸術の評価と可能性」「障害者芸術はアートとしてのマーケットにどんな可能性があるか」「創作の場はどうあるべきか」の三つのテーマを提起したが、服部先生のご講演からの問題提起に順じて鼎談していきたい。まずは、皆さんが日ごろお感じのことをお聞かせください。

建畠 障害者の芸術をアートという視点で長く見てきているが、5年ほど前に厚労省、文化庁、文科省の合同で障害者の芸術についての研究会を行い各現場で働く方や研究



松坂浩史氏（上右）・高島 寛（上左）・建畠 哲氏（下左）服部 正氏（下右）

者と議論した。障害者の芸術を福祉的生き方と、アートの振興と大まかに分けられた議論であった。アートの振興についての議論は神学論争になってしまいうる局面があり、そうなることよりも、起こりうる問題や課題はたくさんあるが、問題点は起きた時に考えることとして、とにかくやってみることが大事であると考えている。

松坂 障害者の社会参加について、近年ではパラリンピックに対する関心が非常に高まっている。しかし、パラリンピックは、一部のトップアスリートのものであり、身体障害のある方の晴れの舞台であるが、同時に、障害のある方々が余暇として身体を動かせる環境も整っていくことも大事なのではないか。これまで、全ての障害者スポーツが厚生労働省であったが、スポーツ庁の発足によりパラリンピックがスポーツ庁の担当となったことは大きな変化であった。

文化庁は、京都移転を機に障害者芸術を推進していく。京都に置かれた地域文化創生本部では、その広報を兼ねて本部長室に天才ARTKYOTOの作品を飾っていて、訪ねてくる人の興味を引いている。本日、聞きたいこととして、作品の評価

の中に障害者というアーティストの属性を入れるのか。また、機会が十分に保障されていない人に、どのような施策が必要なのか考えたい。

作品の評価基準について

高島 評価の基準は何であるかは、大きい問題である。

建畠 アートの振興という点で健常者と障害者の評価に区別がないが、どうしても社会的正義感が働いてしまうところがあり、また大事にしたいと思う。過去の経験では一般の展覧会の応募でアーティストが障害者だと分からなかった作品が二つあった。天才と言われる芸術家が障害者のインスピレーションに影響を受ける事実としてある。

服部 デュビュッフェはコレクターでもあり、買いたい作品、好きなおもしろい作品の塊をアール・ブリュットと名づけたわけで、障害者芸術をそのアール・ブリュットを基準に見る必要はない。確かにヨーロッパやアメリカにはアール・ブリュットのコレクターは多く、画廊もあるのでアール・ブリュットという枠組みを利用して高い評価を得ることはできるかもしれない。

だからと言って障害者芸術がデュビュッフェの好む芸術を目指す必要はない。

高島 障害者の作品は面白い作品が多い。作品をみてアーティストが障害者なのか健常児健常者なのか判別できるとはかぎらないが、芸術もパラリンピックのように差をつけて展覧会などを行うと問題があると思う反面、表現の世界でもそうしたことを確立する必要があるのではないか、皆さんの

お考えを伺いたい。

松坂 印象派が画壇に

受け入れられなかった時代があっても独自に展覧会を行っていくこと

とでいつの間にか全体の美術の中に納まっているのと同様に、新たなグループの中から次

世代に残る美術が、今ある大きな流れに組み込まれるということになるのではないか。既存の評価の軸で評価されていない新しいグループも、評価の軸をその中から作る

必要があるのではないかと思う。

建畠 とても言いにくいことだが、障害者には才能のある人の比率が相当高いと感じる。また応募された作品の中では、面白いのは、知的障害と精神障害の人の作品が多い。ただ障害の種類によって評価を考えることは論じにくい。

服部 評価の軸は様々あるが、現在の障害者のアートに求められているのはオリジナリティである。だが、評価の軸がそれだけであることにも問題がある。障害者には独自の制作過程があつて、そこにこそ私たちが学べるものがあつたとしても、公募展形式や展覧会形式だけでは大事なことが抜け落ちてしまうことになる。

松坂 障害者の作品を制作過程も含めた時間軸のあるアートとしてみるのはよいことだと思うが、出来上がった作品の素材をどう評価するかなどの議論も必要だと思う。

（後編は会報17号につづく）



寄稿

ダウン症候群の楠川敦士が生まれて

楠川 真里子

敦士の誕生と2歳までの入院生活

秋晴れの1993年10月8日、敦士は大阪府吹田市の病院で生まれました。生まれた時、身体末端が紫色で、泣き声も細く、すぐに検査のためにどこかへ連れて行かれ、敦士に会えたのは24時間後くらいでした。その後ダウン症で、肺高血圧を伴う重い心臓病とわかりました。母乳が吸えず哺乳瓶でわずかなミルクを飲んでいました。当時私はダウン症の知識はなく、不安が募るばかりでした。

ダウン症候群とは、体細胞の21番染色体が1本余分に存在し、計3本（トリソミー症）となることで発症する先天性疾患です。

その後、集中治療室が空くのを待ち心臓手術を受けました。術後は感染症と戦いながら2歳までベッドに置かれた酸素テントの中で入院生活を送りました。退院する時は家に酸素テントが運び込まれ、一喜一憂しながら過ごしたものでした。

絵との出会いと一度目の転機

敦士が4歳になる頃、皆と同じ幼稚園に通わせたいと思い枚方市内の幼稚園に入園の願いをしましたが、片っ端から断られました。運よく兄の通っていた公文教室の先生から高槻市内にある公文学園のびてゆく幼稚園を紹介され、快く入園の許可を頂

きました。

園では皆と同じように公文の勉強をし、園庭で仲良く遊んでいる姿を見て安堵しました。

卒園し小学校に入学

してからは、体が小さく重いランドセルを背負って15分程の集団登校もできず大変でしたが、低学年のうちは皆と仲良く遊んだり、見よう見まねで楽しく過ごせました。

絵との出会いは1年生の時、小学校の近所に塔本アトリエ教室があり通うようになり、初めは、何を描いているかわからないような絵でしたが、画用紙にカラフルな色を塗っており、4年生から油彩の具を使い静物画を描き、4年生から油彩を使い鮮やかな色の作品をコッソツと描いていました。その静物画から自分で表現するようになり、絵が変わっていくのを見て少しずつ成長しているのだと思いました。

一度目の転機が訪れたのは15歳の時、塔本アトリエ教室主催の「表現の欲望 アール・ブリュット in ひらかた展（くずはアー



トギャラリー」の開催中に、敦士の描いた信楽焼のたぬきの絵を買っていただいた時でした。その時に塔本先生から「もうこれで画家になりましたね」と言っていただけで大変驚き、うれしかったのを覚えています。

その後、大阪府立交野支援学校に入学して、茶道、オカリナ演奏、スペシャルオリンピックスのボーリングもやりながら、ずっと塔本アトリエ教室に通い、夢中で絵を描いていました。

支援学校の卒業と二度目の転機

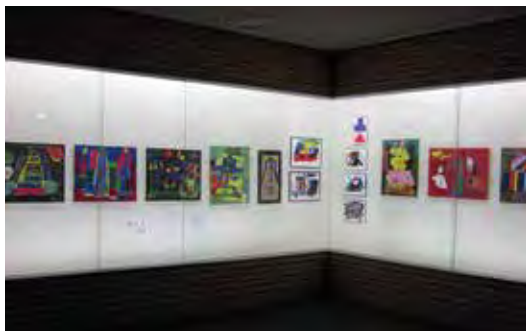
二度目の転機が訪れたのは、通院の帰り道に見た三日月（敦士はバナナと言います）に心を奪われ、宇宙シリーズの絵がたくさん出来上がりはじめた頃です。20歳の誕生日に、枚方市主催の「アートフラッシュ vol.86 楠川敦士展」として、『To the Space!』をテーマに初めての個展を開催させていただきました。こちらでも1点作品を購入していただき、幸せな思い出となっております。



この頃に天才アートKYOTOのアトリエにも参加させていただくことになり、いつも楽しく絵を描いています。

言葉での表現は難しい敦士ですが、これからも絵を描き続けていってくれたらと思います。

一人でも多くの方々に敦士ワールドの作品を観ていただければ、大変うれしく思います。



アートフラッシュ vol.86 楠川敦士展【To the Space!】の会場（上）と楠川敦士さんとお母様・真里子さんの2ショット

服部 可菜恵 Kanae HATTORI
1994年生

彼女は「花」にこだわって描き続けている。図鑑などの写真を題材にすることが多いが、その景色からは離れて、画面上に「服部可菜恵流」といべき独特にデザイン化された花卉や葉・茎が再構成されていく。完成された作品は、服の生地などに使いたくなるような味わいがある。

「ツバキ」
画用紙・ペン・アクリルガッシュ 2017年



「バイカモ」
画用紙・ペン・水彩絵具 2017年

服部可菜恵

土屋 彰男



「ヒョーザメ」キャンパス・アクリルガッシュ・クレパス 2016年



「サクラとネコ」キャンパス・クレパス・アクリルガッシュ 2016年

土屋 彰男 Akio TSUCHIYA 1971年生
彼のテーマは動物や花卉類が多く、その選定基準は、「姿・形の面白さ」「対比的な彩り」などではないと思われる。彼は、選んだモチーフを画面の中央に描き、まわりに大小様を配したり、季節を象徴する花などをちりばめたりする。その構成が見る者に強い印象を与える。



「オオサンショウウオ」キャンパス・アクリルガッシュ 2017年

TENSAI
ART
NOTE

天
オ
ア
ー
ト
ノ
ー
ト

『バリコレ2017 in 京都』に出展

10月28日(日)、左京区の岡崎公園でバリコレ2017 in 京都が開催されました。

バリコレは、NHKのマインノリティーや障害者のための情報バラエティ番組『バリバラ』の一環として行われたイベントで、『みんな違ってみんないい』を合言葉に障害を魅力に変えるバリアフリーファッションショーです。

当日はあいにくの雨の中でしたが、バリコレファッションショーの後、着物姿の「車いす和文化おもてなし隊」が登場するなど、京都市民や観光客で賑わいました。

天才アートKYOTO

も、「文化庁京都移転・私たちができること推進チーム」として、ブースに作品を展示しました。

『バリコレ2017 in 京都』

主催 NHK京都放送局

共催 京都市

協力 文化庁地域文化創生本部 東京オリンピック・パラリンピック組織委員会

SCREEN HD様に
原画レンタルを開始

11月より株式会社SCREEN HDに、当機構の所屬作家、土屋彰男氏が制作した4作品の原画をレンタルし、展示していただくことになりました。同社は文化の支援、社会福祉活動の一環として、障がいのある人に

よるアート創作活動を支援されています。

作品は、同社の本社および洛西事業所内のロビーに展示され、多くの来客者にご覧いただいています。



京都精華大学とコラボ展示

11月15日(水)～23日(木)、京都精華大学ギャラリーフロールにて「共生社会の実現に向けて一歩を踏み出す展覧会」が開催されました。作品は並列に、ボードレスに扱うということを示すために、天才アートKYOTOと学生・教職員の作品が交互に展示されました。

同展は、京都精華大学北波研究室の主催、天才アートKYOTOの共催、京都市教育委員会の後援。会場には、学生や教職員をはじめ、市民の姿も見かけられました。



会員・寄付を募集しています

天才アートKYOTOは、当機構の趣旨や活動に賛同していただける会員を募集中です。会員は「正会員・賛助会員・名誉会員」の3種類。また、寄付金や助成金、「障碍者アートミュージアムKYOTO設立支援基金」などのお申し込みも随時受け付けて

います。詳しくはホームページに掲載していますので、ご協力をよろしくお願い致します。
<http://tensai-art-kyoto>

《編集後記》

本年は、1月の「天才アート展 in 東山」花と鳥と動物とを皮切りに、5月企画展「非形態の表象」、5月の左京市民活動センターの展示、8月の京都マリーの展示、9月下旬開催の『ウイングス京都・ギャラリースペース開設記念展 "endless breath"』、そして10月の天才アート展2017と多くの作品展を開催し、5千人を超える市民や府民の皆さんなどに展覧いただきました。

来年も、1月の企画展「天才アートABC展」をスタートに、5月企画展など主催展、協賛展など多彩な展示を企画し、天才アートKYOTOの認知度向上と、支援をいただくための活動を展開して行きます。ご支援のほどよろしくお願い致します。

【表紙の作品について】

根ヶ山は、ひとつのモチーフ(それは、犬、昆虫、恐竜、魚、メカロボットと多岐だが)を必ず姿態や意匠をさまざまに変化させて、「シリーズ」のように連作することが多い。例えば子供の時に誕生日祝いでもらった犬のぬいぐるみをモチーフとしたときには、実に80枚に達している。作品を並べると、その色調や意匠の変化と連続性が、観る者になぜか安心感とワクワク感のようなものを与える。



『ローリングベトリファクトインセクト』(上)・『ドラグ兵 飛兵長 (ハイドラゲーン)』(下) 根ヶ山 恵司 Keishi NEGAYAMA
画用紙・カラーペン 210×295mm 2017年

広告主募集中!

『会報 天才アート』は、当機構の活動にご賛同いただける企業様や団体・組織の広告協賛を募集しています。会報の発行部数は毎月3,500部で、会員・協賛団体、関係機関、各地の美術館などに配布・配架をしています。ご協力を、ぜひともよろしくお願い致します。
1枠…1万円(4回掲載)
●お問い合わせ・お申し込みは、
info@tensai-art-kyotoまで

MORI
(有) 森田美術印刷

京都上鳥羽
の
印刷会社

京都市南区上鳥羽火打形町12 ☎ 075-692-3131

妙心寺 塔頭

養徳院

永代供養のお寺 075-461-2898



吉村建設工業(株)

京都市中京区西ノ京小倉町135番地
075-802-1360

発展、ともに前へ...
洛和会ヘルスケアシステム®
洛和会丸太町病院 洛和会音羽病院 洛和会音羽記念病院
洛和会音羽リハビリテーション病院 洛和会東寺南病院

画材・額縁
画箋堂
京都・河原町五条

一級建築士事務所
町家・古民家再生 / マンション改修

(株)共立ホーム
エンジニアリング

06 (6788) 5402 kap@hyper.ocn.ne.jp

Kuretake